

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：37105

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720161

研究課題名(和文)「ポスト国民国家」時代の主体性 オーストラリア文学におけるその可能性

研究課題名(英文) Alternative Subjectivity in the Post-Nation-State Era: Emerging Possibilities within Australian Literature

研究代表者

一谷 智子 (Ichitani, Tomoko)

西南学院大学・文学部・准教授

研究者番号：70466647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：近代国民国家が成立してゆく過程では、「国民文学」が建国の神話とナショナル・アイデンティティを構築するための機能を果たしてきた。平和な植民の物語が生産され消費されてきた豪州でも、1990年代になって先住民と非先住民の和解問題が社会的文脈で重要課題となり、「ポスト国民国家的主体性」を模索する文学が誕生している。本研究では、主流社会と交渉・折衝しながら主体構築を目指す先住民文学と、従来の「国民文学」を越えて、非先住民オーストラリア人の所属意識やナショナル・アイデンティティへの再考を促す作品を考察し、現代豪州文学が「ポスト国民国家」時代の文学的地平を拓き、新たな主体性を構築している様を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In the formation of the modern nation-state, national literature functions as a means to construct national identity and myths of national foundation. In Australia, from the 19th to the mid 20th century, narratives of the peaceful settlement of the "Terra Nullius" were produced and circulated. In the 1990s, the issue of reconciliation between Indigenous and non-Indigenous Australians became a significant social issue and literature exploring the formation of subjectivity in the "post-nation-state era" appeared. This study examined works by both Indigenous and non-Indigenous writers and explored how Indigenous people foreground their historical awareness to construct their subjectivity and allow non-Indigenous Australians to reconsider their sense of belonging and national identity. It identified how contemporary Australian literature seeks out a new horizon in "post-national literature" while attempting to construct an alternative subjectivity within this post-nation-state era.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：オーストラリア文学 英語圏文学・文化 主体性 ポスト国民国家 先住民文学

## 1. 研究開始当初の背景

1990年、先住民族委員会とアボリジナル和解評議会が誕生し、1997年には親子強制隔離政策に対する政府の調査書 *Bringing Them Home* が出版された。この調査書は、19世紀後半から1960年代にかけて、キリスト教会や政府機関の同化政策により、10万人にものぼるアボリジニとトレス海峡諸島の子供たちが、親やコミュニティから強制的に隔離された事実を明らかにした。同化政策により強制隔離された人々は「盗まれた世代(ストールン・ジェネレーション)」と呼ばれ、強制隔離の事実と盗まれた世代に対する国家レベルでの認知が和解の争点となってきた。本報告者がこの研究に着手する二年前にあたる2008年、連邦会議で先住民に対する謝罪決議が全会一致で採択され、この正式謝罪によって和解問題は大きな一歩を踏み出した。こうした歴史的・社会的背景において、近年、先住民、非先住民系作家双方の側から、盗まれた世代の問題や土地権をめぐる問題を含めたオーストラリア植民の歴史を再考し、先住民と非先住民の関係性を再構築するためのディスコースを作り出す作品が数多く書かれ出版されている。この動向を捉えながら、報告者は、オーストラリア文学の新たな潮流に見出される「ポスト国民国家的パラダイム」を考察する本研究に着手した。

## 2. 研究の目的

西欧近代文学は、近代国民国家が国民の統合を目指す過程で「主体」としての国民を立ち上げるための役割を担ってきた。オーストラリアでも、宗主国イギリスから独立し、オーストラリアの確固とした独自性と主体性を確立するために「国民文学」が重要な役割を果たした。こうした国民文学の見直しは、1960年代以降の公民権・土地権運動に触発された先住民による文学作品の出版と、1980年代のポストコロニアル研究の台頭によって進んだ。しかし、先住民の土地と文化の剥奪

や虐殺というこれまで語られなかった植民の暴力的な歴史を前景化する文学的試みが非先住民系オーストラリア人側からも進められるようになったのは、和解の問題が本格化する1990年代以降である。本研究は、近年の和解のプロセスにおいて顕著になった先住民と非先住民という対立を越えた共同性の空間を創出しようとする文学的企図を考察し、そこから立ち上がってくる「ポスト国民国家的」主体性について分析することを目的とした。また、かつての「国民文学」が溶解し、新たな文学的パラダイムが模索されるなかで、オーストラリアの「ポスト国民文学」の特性と、国際的な「ポスト国民文学」との共通性について明らかにすることを目指した。

## 3. 研究の方法

オーストラリアにおいて、「ポスト国民文学」を論じる際に、特有の問題として要となるのは「先住民文学」、または「先住民を表象した文学」である。本研究では、以下の3つのカテゴリーに分けて、「ポスト国民文学」の特性とそれを通して構築される主体性について考察した。研究の過程においては、作品分析のみならず、作家へのインタビューや、作家を招聘してシンポジウムを行うことで考察を深めた。

### (1) 先住民系作家による作品

西欧近代文学がナショナルな語りを通して国民的主体を立ち上げてきたように、先住民作家達も、カウンターナラティブを構築することで、民族的主体を立ち上げてきた。報告者は、オーストラリア先住民文学と主体構築にかかわる一貫した先行研究を行ってきており、本研究では、1990年代以降の和解の時代に書かれた文学に焦点を絞って、1960年代から80年代にかけての作品群と比較することで、アイデンティティ・ポリテックスを超えた「ポスト国民文学」へと移行している

様を明らかにしようと試みた。具体的には、2007年にオーストラリアの文学賞の最高峰として名高いマイルズ・フランクリン賞を受賞し、オーストラリアを代表する作家となった先住民作家キム・スコット (Kim Scott) とアレクシス・ライト (Alexis Wright) を中心に分析を進めた。また、研究協力者であるオーストラリア国立大学の研究員であり、先住民作家であるジャンニン・リーン氏 (Dr. Jeanine Lean) を招聘し、シンポジウムを行い、本報告者はリーン氏の研究発表の解題を行った。

#### (2) 多文化主義政策後の移民系作家による作品

1970年代、オーストラリアは白豪主義から多文化主義へと大きな政策転換を図った。その過程で、移民作家の到来とともに異なる文化を表象した多文化主義文学が花開き、従来の「一族・一文化」による国民文学に変化を与えた。本研究では、先住民と暮らし、先住民問題をテーマに創作を行っているセルビア系移民作家B.ワンガー (B. Wongar) の作品群に焦点をあて、移民作家が拓く「ポスト国民文学」の在り方を探った。

#### (3) アングロ・ケルテック系作家による作品

非先住民系オーストラリア人の中でも、特に開拓時代に入植した祖先をもつアングロ・ケルテック系の作家にとって、先住民問題は常に作品のテーマとなってきた。しかし、それらの作品群における先住民の描き方にはコロニアリズムの域を出ないという問題点が指摘されてきた。本研究では、先住民と非先住民の和解の過程で出版された作品の中でも、死刑囚としてオーストラリアへ送られた入植者であった自らの先祖をモデルに、これまで語られなかった植民の歴史の暗部を描いたケイト・グランヴィル (Kate

Grenville) の作品を中心に、建国神話を超える「ポスト国民」文学について検証した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 先住民系作家による作品

先住民作家たちが、マジョリティである非先住民系オーストラリア人の側からの植民地主義の表象に対して異議申し立てを行い、主流社会の言説や文化と折衝・交渉しながら、その主体性を構築しようとする動きを考察した。1990年代の和解の時代において、オーストラリア文学界を代表する作家としての地位を築いた先住民作家にキム・スコット (Kim Scott) とアレクシス・ライト (Alexis Wright) がいる。これらの作家の作品、例えばキム・スコットの『ベナン』 (Benang, 1999) は、白人至上主義の祖父によって白人化するように育てられた先住民の血を引く主人公を通して、正常化され規範化された「白人性」の虚構性を暴き出した。さらに、スコットの最新作『死んだ男が踊る』 (The Deadman Dance, 2010) は、19世紀初頭の植民地時代初期における先住民と移住者の接触に立ち返り、先住民伝統文化の破壊と同時に西欧文化との出会いの中で変容しつつも豊かになってゆく先住民言語や歌や踊りといった文化の混淆の過程を描くことで、ポスト・ナショナルなフィクションの領域を広げている。アレクシス・ライトの『カーペンタリア』 (Carpentaria, 2006) は、架空の町を舞台にマジックリアリズム的先住民の世界観を前景化し、主流文化をも貪欲に取り込みながら力強く存在し続けてきた先住民文化のもつ弾性と回復力の表象に成功している。さらに、ライトの最新作『スワン・ブック』 (The Swan Book, 2013) は、イギリスによるオーストラリアの植民地化が先住民に与えた影響を描きながらも、気候変動と環境問題というグローバル・イシューを先住民的視点で描き、文字通り国民文学の枠を超えたポスト・ナショナルなフィクションの在り

方を示すものとなっている。

さらに、2012年11月、共同研究者である  
ジャニン・リーンを招聘して、シンポジ  
ウムを行った。リーンは、「ライフ・ヒス  
トリー・ライティング」というジャンルを提  
唱し、先住民女性文学の新しい捉え方、読み  
方を構築しつつ、先住民的視点からの文学研  
究とその理論化の可能性を指摘した。ライ  
フ・ヒストリー・ライティングは、ある人物  
の生涯を表象する自伝や伝記よりはるかに  
長く広い時空間に渡る複合的な声を扱うも  
のであり、作品をフィクションかノンフィク  
ションかで分類する西欧文学の伝統を越え  
て、事実と虚構、客観と主観という二項対立  
に挑戦し、それらを融合させている。そして  
アボリジニの人々の究極の文学形式とされ  
るストーリー・テリングに拠りながら、公の歴  
史には記されてこなかった先住民の歴史と  
経験を活字化された文学領域へと移植する  
ことがライフ・ヒストリー・ライティングが  
目指すものである。本シンポジウムでは、報  
告者が解題をし、こうした従来の西欧的研究  
理論を打破し、先住民的視点からの歴史研究  
と方法論を構想する場を持った。

本研究の成果は、『広島修大論集』53号掲  
載論文“Reading Madness in Alexis Wright’s  
*Plains of Promise*”と『南半球評論』28号に  
「秘密と糸—オーストラリア先住民女性の  
ライフ・ヒストリー・ライティング1988  
- 2012 -」(解題)としてまとめた。

## (2) 多文化主義政策後の移民系作家による 作品

土地と人権を剥奪され苦境に置かれたオ  
ーストラリア先住民の状況を、自身の故郷セ  
ルビアの歴史と経験を通して理解し表象し  
得た移民作家にB・ワンガーがいる。ワンガ  
ーは、1960年代、オーストラリアに移住し、  
北部で先住民と暮らした。その経験を通して、  
ワンガーは1950年代のイギリスによる核実

験と、その後続いたウラン採掘が先住民に  
与えた影響に問題意識を持ち、写真と文学作  
品に表象した。ワンガーの核を主題にしたニ  
ュークリア・サイクル(the nuclear cycle)と呼  
ばれる連作小説、『ワグ』(Walg, 1983)、  
『カラン』(Karan, 1986)、『ゴボ・デジャ  
ラ』(Gabo Djara, 1988)、『ラキ』(Raki,  
1994)は、アメリカやヨーロッパ諸国で出版  
され、『ワグ』は国際ペン賞(The P.E.N.  
International Award)を受賞した。また、  
写真は、写真集『トータムと鉱石』(*Totem and  
Ore*, 2006)として出版されている。40年以  
上に及ぶ作家活動において、ワンガーは、多  
数の小説や詩、戯曲を出版し、国際的評価を  
得ている作家である。彼の代表作 *Track to  
Bralgu*(1978)は、ジャン＝ポール・サルトル  
がフランスで主宰した *Les Temps Modernes*  
に掲載され、アメリカとイギリスで出版され  
た後、ドイツ語、オランダ語、ロシア語をは  
じめ多くの言語に翻訳された。しかし、この  
ような海外での評価に比して、オーストラリ  
ア国内におけるワンガーの作品の出版と評  
価は遅れた。その理由として、セルビアから  
の移民であるこの作家が、本名を用いずに、  
B. Wongar という先住民名を用いて創作を行  
ったことが挙げられる。1980年代、ワンガー  
のアイデンティティを巡っての議論が巻き  
起こり、彼の作品は、リテラリー・ホークス  
として、オーストラリアの文壇から締め出さ  
れてしまったのである。本研究では、報告者  
が行ったワンガー自身へのインタビューと  
収集した資料をもとに、ワンガーが当時国家  
的機密事項であった核問題に言及したため、  
本名での出版の道を絶たれたこと、ペンネー  
ムはそのためのカモフラージュであった事  
実を明らかにし、作品の再評価を目指すとも  
に、核被害を捉えた写真と連作小説(四作  
品)に焦点を当て、彼の作品を貫く核への批  
評性を考察した。ワンガーの祖国セルビアは  
19世紀から20世紀にかけてのオスマン帝国

の支配と世界大戦下におけるナチスによる支配に苦しみ、1990代には民族浄化の大義名分下の悲惨な虐殺、NATOによる劣化ウラン弾の爆撃を経験してきた。この引き裂かれ続けた故郷の歴史を通して、ワンガーはオーストラリア先住民が辿ることになった痛みに分け入ることができたといえる。ワンガーが映した写真、そしてそこから紡ぎだされる小説群は、文化的・人種の境界を越えて、異なる歴史的時空間をつなぎ、ジェノサイドの世紀とされた二十世紀の戦争文化、そしてその残照のなかにある現在の核文化に警鐘をならし、そこからの脱却の道を模索している。先住民文化への深い共感と理解に加えて、ワンガーという作家の持つ越境性と想像力、ポスト・ナショナルな主体性が、先住民の人々の置かれた状況とその背後にある植民地主義的権力、暴力の構造を嗅ぎ取り、複合的で包括的な核批評を可能にし得たことを分析した。国家という枠組みを超えて、セルビアでの経験とオーストラリア先住民の核被害の経験の連累の表象に成功し、国民国家という制度とその戦略の中で展開される戦争や核政策に対する批判を通して、ワンガーは脱国民国家的主体性を構築していったのである。ワンガーの文学は、ポスト国民国家的文学の一つの在り方を提示していると言える。この研究の成果は、2013年6月9日に名古屋商科大学で行われたオーストラリア学会での発表「核とオーストラリア文学 B. ワンガーの写真集と連作小説を中心に」と、2014年3月に刊行されたオーストラリア学会の学会誌掲載論文「核とオーストラリア文学 B. ワンガーの写真集と連作小説を巡って」にまとめた。

### (3) アングロ・ケルテック系作家による作品

オーストラリアの植民と建国の神話を再考し、長い間隠蔽されてきた植民の歴史の暗

部に光を当てることで、先住民と非先住民の和解に向けてポストナショナルな語りを模索した作家の一人として、ケイト・グレンヴィルが挙げられる。オーストラリア史における先住民の不在を初めて指摘した歴史家W.H.スタナー(W.H. Stanner)は、「オーストラリアの歴史には秘められた血の川が存在する」と述べ、語られない植民の暴力的な歴史を「オーストラリアの大いなる沈黙」と呼んだ。本研究が取り上げたケイト・グレンヴィル(Kate Grenville)の『秘密の川』(The Secret River, 2005)は、このスタナーの言葉からタイトルのみならず作品のインスピレーションを得た歴史小説である。『秘密の川』は、18世紀末のロンドンの貧民街に生まれ育ち、テムズ川の船頭となったウィリアム・ソーニルが、貧しさから盗みを犯し、囚人として当時流刑植民地であったオーストラリアへと送られた後、自らの土地を手に入れて成功してゆく過程を描く。しかし、そこに描かれる開拓者の物語は、かつてオーストラリアという国家建国の神話とナショナル・アイデンティティの構築に関与したヘンリー・ローソン(Henry Lawson)やバンジョー・パターソン(Banjo Paterson)などの『ブリティン』(the Bulletin)作家たちの物語とは大きく異なる。『秘密の川』は、四代遡るグレンヴィルの祖先をモデルに、19世紀初頭のニュー・サウス・ウェールズ植民地で繰り広げられた、入植者と先住民の接触と対立、入植者による先住民の虐殺という歴史の暗部を前景化している。本研究は、グレンヴィルの家族史ともいえる本作が、作家自身が、昔語りの中で祖母や母から聞かされた先祖の物語、すなわち平和な開拓と植民という国家建国の物語との連動において醸成された家族の物語を、歴史的資料の調査を基に書き換えてゆく様を考察した。

発売されるやいなやベストセラーとなり、コモンウェルス文学賞をはじめ多くの賞を

受賞した本作は、「歴史戦争」(history wars)と呼ばれるオーストラリア植民の歴史をめぐる解釈、特に辺境での先住民と植民者の衝突に関して論壇で交わされた議論に大きな影響を与え、『『白人』オーストラリア人であるとはどういうことなのか?』、「オーストラリアの歴史はどのように語られるべきなのか」と言った問題への再考を促した。本研究は、この歴史論争との関連において、『秘密の川』がフィクションという形式を用いることで、非先住民系オーストラリア人の所属意識を問い直し、ナショナル・アイデンティティの再構築を試みに成功していることを明らかにした。さらに、本作が近年のオーストラリアで重要課題となってきた先住民と非先住民系オーストラリア人の和解の問題と向き合う中で、「オーストラリアの大いなる沈黙」に声を与え、ポスト・ナショナルな文学の地平を拓くことへ大きく寄与したことが検証された。(この成果は現在論考にまとめている最中であり、書籍の1章分として発表予定である)。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

Tomoko Ichitani. "Reading Madness in Alexis Wright's *Plains of Promise*," 『広島修大論集』53/1, 247-264, 2012、(査読無)

一谷智子「核批評再考—アラキ・ヤスサダの *Doubled Flowering*—」日本英文学会『英文学研究』和文号 89号、2012、21-38頁。(査読有)

一谷智子「核とオーストラリア文学—B. ワンガーの写真集と連作小説を巡って」オーストラリア学会『オーストラリア研究』27号、2014、80-93頁。(査読有)

[学会発表](計 3 件)

一谷智子「核とオーストラリア文学—B. ワンガーの写真集と連作小説を中心に」(オ

ーストラリア学会全国研究大会、名古屋商科大学、2013年6月9日)。

一谷智子「秘密と糸 オーストラリア先住民女性のライフ・ヒストリー・ライティング 1988 - 2012」(オーストラリア・ニュージーランド学会シンポジウム「複数の文化・複数の歴史を書く」(解題)、立命館大学、2012年11月12日)。

一谷智子「ニュークリア・サイクル：B. ワンガーの連作小説にみる惑星思考」(エコクリティシズム研究学会、神戸市外国語大学、2014年8月9日 [発表確定])

[その他]

一谷智子「秘密と糸 オーストラリア先住民女性のライフ・ヒストリー・ライティング 1988 - 2012」(解題)、『南半球評論』28号、2012、18-21頁。

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

一谷 智子 (TOMOKO ICHITANI) 西南学院大学・文学部英文学科・准教授

研究者番号：70466647